動機と語彙

内田　健

C.W. ミルズが1940年に論文「状況に布置された行為と動機の語彙」を公刊して以降，社会学的な「動機」研究は着実な進展を遂げてきた．だが，その過程で，「モーティヴ・トーク」にかかわるさまざまなコンセプトの精緻化が多くの論者の手ではかられてきたのにくらべて，ミルズがケネス・バークから継承した「動機の語彙」という発想じたいを彫琢する作業はなおざりにされてきたきらいがある．

本稿は，「動機」の指示対象に何を含めるべきか，また，「語彙」に分析の焦点を合わせるとは何を意味するのかを検討し，「動機の語彙」という発想のもつポテンシャルを明らかにすることに目的を置く．

はじめに

C.W. ミルズが提起した「動機の語彙 (vocabularies of motive)」論以降，社会学史の一隅で「動機の概念は数多の論者の手で広範に適用されてきた」(Albas and Albas 2003: 349 強調は原文) という声がある．一方に，「社会学において，動機はひどく蔑ろにされてきた概念である」(Campbell 1991: 89) と評定する向きもある．

一見すると，両者の診断はまったく相容れないものに映る．だが，子細に検討すると，見かけほどの懸隔はない．前者は対面的相互行為状況で動機が演じる機能に着目する「モーティヴ・トーク (motive talk)」論の隆盛に「広範な適用」を見いだすのに対し，後者は「モーティヴ・トークの研究は，ミルズが当初描いた計画を代替するものではない」という見かたに立つ，というほどの違いである．じっさい，前者の著者たちも，「ミルズの用いた動機が［M.B.］スコット＝［S.M.］ライマンによって釈明 (account) に改名された」事情を摘記している (Albas and Albas 2003: 349 強調は原文．［ ］内は引用者)．

知られるように，1970年代以降，モーティヴ・トーク論はコンセプトの細分化を繰り返しながら活発に展開されてきた[(1)]．だが，コリン・キャンベルが指摘するように，それは動機の語彙論そのものではなく，そこから派生した「動機の機能論」に資する分析用具の開発・改良を追究した集合的営為だったとみるのが適切である．動機の語彙論は，機能論に

尽きるものではない.

本稿は，動機の語彙論の主要部品である「動機」と「語彙」とが指示する内容を再点検し，動機の語彙論のポテンシャルを解明する試行である.

1 ミルズはウェーバーを「誤読」したのか？

近年，社会学における――モーティヴ・トーク論とは異なる方向での――動機論の復権という問題意識に立つ論考を公表してきた論者に，コリン・キャンベルがいる（Campbell 1991; 1996a; 1996b）. 自説の開陳にあたってキャンベルが繰り返すのは，動機論はマックス・ウェーバーの敷設した道に回帰すべきだという主張である. キャンベルに言わせれば，「動機の語彙論―モーティヴ・トーク論」系統の議論は，ウェーバーの系譜に連なっているという自己認識と裏腹に，正道を大きく外れた方角に進んできた.(2)

キャンベルがとくに問題視するのは，ミルズのウェーバー理解である. 彼の診断するところ，ミルズはウェーバーの「動機」概念をひどく読みちがえている. そこで，指摘される「誤読」の詳細を，すこし立ち入って検討してみよう. キャンベルの論難は動機の語彙論の考想を真っ向から否定するものであり，結果として，ミルズの独自な動機論の形成を駆動した論理を浮き彫りにする恰好の反射板となっている.

問題になるのは，『経済と社会』の巻頭論文「社会学の根本概念」で「動機」の定義が示される有名な一節である.

> »Motiv« heißt ein Sinnzusammenhang, welcher dem Handelnden selbst oder dem Beobachtenden als sinnhafter »Grund« eines Verhaltens erscheint. »Sinnhaft adäquat« soll ein zusammenhängend ablaufendes Verhalten in dem Grade heißen, als die Beziehung seiner Bestandteile von uns nach den durchschnittlichen Denk- und Gefühlsgewohnheiten als typischer (wir pflegen zu sagen: »richtiger«) Sinnzusammenhang bejaht wird (Weber [1922] 1964: 8).

この箇所をできるだけ平明な現代日本語に移し換えてみよう.

> 「動機」とは，行為者自身または観察者にとって任意の行動の有意味な「理由・原因」であるように映る意味連関を指す. 相前後して生起した任意の行動が「意味適合的」であると言えるのは，平均的な思考・感情の習慣に照らして，その行動の構成要素のあいだに類型的な（私たちの通常の言いかたでは「適正な」）意味連関が成り立っていると私たちが認めるばあいにかぎられる.

これほど短い断片なのに，踏破に際しては解釈上の難所をいくつか通過しなければならない．文意の斟酌に臨む読者は，以下の疑問への回答を迫られることになる．

(1) 「観察者」とは誰を指しているのか．
(2) 「観察者」は「動機」のデータをどうやって収集するのか．
(3) 「私たち」とは誰を指しているのか．

問題の箇所をめぐるミルズの解釈に対するキャンベルの異論は，直接には(1)にかかわるものだが，(1)への論及を通じて実質的に(2)と(3)の問題にも及んでいると考えることができる．

キャンベルは，ウェーバーの行文での「観察者」が「社会学者」を指示しているのは明らかであるところ，ミルズは完全に誤読していると言う（Campbell 1996b: 31-32）．

問題になるのは，ウェーバーの「動機」定義をミルズがパラフレーズした「動機は言葉として，行為者と任意の状況に居合わせた他のメンバーの両者に対し，社会的・言語的な行為にかんする疑問への疑問の余地のない応答を提供する」（Mills 1940c: 907）という一節である．たしかにここでミルズは，ウェーバーの「観察者」を，行為者と状況を共有する「他の社会的行為者」と等置する解釈を明確に打ち出している．

同じ一節については，ウェーバーが「行為者」と「観察者」を繋いだ「または（oder, or）」という表現を，ミルズが「と（und, and）」に変更している点も問題になる．「動機」概念が「他者との相互行為がおこなわれる状況」と「状況に居合わせる他者」にきつく繋留される結果，行為者が一人きりで居る状況で主観的に抱く動機――ウェーバーの定義が明らかに包含している類いの動機―がそっくり視野から外されることになるからである．さらに，「動機とは意味連関である」というテーゼがこともなげに「動機とは言葉である」へと変換されているのも違和感を生じる（Campbell 1996b: 31）．

総じて，「根本において社会的な性質を帯びた」現象として動機を捕捉しようとするミルズの行き方を，キャンベルは真っ向から否定する．彼に言わせれば，それは「純粋に私秘的•個人的な」（Campbell 1996b: 32）主観性の様態を重要な記述対象として遇するという，ウェーバーが当初掲げた課題を回避する方途にほかならない．

篤実なウェーバー研究者の目には，重要なテクストを都合のよい形に切り詰めて構築中の議論の建材に流用するミルズの手つきが，いかにも粗暴と映ったのだろう．だが，ミルズがそのように手を加えたのにも，それなりの事情があったはずだ．ウェーバーのテクストに内在しつつ，ミルズによる「誤読」を擁護することはできるだろうか．

まず，「動機は言葉である」というテーゼが導入される経緯を追跡してみよう．この問

題は，上記の疑問(2)と深く関連している．すなわち，動機はどのようにして観察や分析の対象として据えられるのか，という問題である．

ウェーバー自身，「観察者」という言葉を用いている以上，動機を観察の対象と見なしているのは明白である．「観察者」としての「社会学者」は，何らかの手立てを講じて，観察可能な動機のデータを入手しなければならない．ところが，ウェーバーのテクストには動機を観察の俎上にのせるまでの手続きが明示されていない．その点，「動機」を「社会的行為者が行為の解釈をおこなう際に使う用語（terms）」であると特定し，「動機の帰属と言明が行為に果たしている機能を観察可能な言語的メカニズムとして分析する」（Mills 1940c: 904 強調は原文）というミルズの研究計画は，ウェーバーのいう「動機」を経験的研究の軌道にのせる具体的な手続きを提案したものと評価できるだろう．そもそも，行動の「理由・原因」を言葉（話し言葉／書き言葉）で表象することなしに，その有意味性を判別するという作業がいかにして実行可能か，想像することさえ難しい．

つぎに，「観察者とは行為状況に共在する他の参与者である」というテーゼを考えよう．その際手がかりとするのは，上記の疑問(3)に掲げた問題である．

ウェーバーによる「動機」定義の一条には，「行為者」と「観察者」のほかに「私たち」という第三者が登場する[(3)]．

読み過ごされがちだが，そこで「私たち」に配当されている役回りはきわめて重要な意味をもつ．というのも，行動の意味適合性を判別する際に参照される「平均的思考・感情習慣」の持ち主として，任意の意味連関の「適正」性を是認もしくは否認する資格を授与されているのが，その「私たち」なのだから．

ここでの「私たち」を「社会学者」に限定するのはいかにも無理筋だろう．「平均的な思考や感情の習慣」とは「常識」の別名であると読めるからだ．言うまでもなく，常識とは，市井の人びと，つまり，広く日常生活者に分有されている知識をいう．とすれば，ここでウェーバーが「観察者」による「動機」認定の規準として常識を，同時に，認定の有資格者として日常生活者を，事実上持ち出していると読み込むのは，ごく妥当な解釈であると言えないだろうか．

そうなれば，「観察者」を「社会学者」に限定する根拠も消失する．常識に照らし合わせて行動の「適正／不適正」を判別できる者であれば誰もが――もちろん「社会学者」も含めて――「観察者」の任に堪える．こうして，「観察者」を「状況参与者」一般に拡張したミルズのテーゼは，ウェーバーのテクストに伏在していた要素を表面に浮上させたものと読むこともできるのである．

西川珠代（1991: 69, 75）が的確に指摘したように，「社会学者」としては，むしろ状況内の「行為者」と「観察者」の相互行為を一望する構図を確保できる場所に，「観察の観察」

を遂行する視座を置きなおすことになるだろう.[4]

ところで,「観察の観察」というオーダーを導入することで,動機論が取り扱える領域は大幅に拡張された.ミルズがウェーバーの動機論に施した改変として特筆すべきは,むしろこの点である.「相互行為参与者」に「観察者」の役割を割り当てるということは,別の角度からみると,すべての「観察」を分け隔てなく「データ」として扱うことを意味する.当然のこと,「観察者」が「社会学者」であるばあいも,彼/彼女の「観察」が受ける処遇は一般の「相互行為参与者」の「観察」と同等である.こうして,「社会学者」,あるいはさまざまな分野の専門家が行う動機の帰属もまた,動機の経験的研究の守備範囲内に位置づけられることになったのである.

以上みてきたように,ミルズのウェーバー解釈をめぐってキャンベルが提出した批判の主要部分は,内在的な反駁が可能である.ミルズの解釈は正統とは見なしがたいのかもしれない.だが,ウェーバーのテクストが包含する論理の追究を徹底した結果として了解できるレンジには収まっていると,認めてもよいのではないか.

私は,キャンベルとは真反対に,「根本において社会的な性質を帯びた現象」として動機を捕捉する方法を模索したミルズの行き方を支持する.だが,キャンベルの指摘には,肯綮にあたっているものもある.

第一に,ミルズによる「言葉としての動機」の挙例が任意の行為をめぐる「疑問」への「応答」に偏っていると指摘していること(Campbell 1996b: 109).たしかに,「理由・原因」が言葉として語られる典型的な場面として,疑問に対する応答を想定するのは自然である.けれど,「疑問—応答」というフォーマットは,つねにそれとして顕在化しているわけではないのも確かだ.疑問の提起をあらかじめ封じ込めるべく表明される動機もあれば,問わず語りに吐露される動機もあるだろう.「疑問—応答」のシークエンスの外で語られる言葉が「動機」として機能する場面を見逃すべきではない.

第二に,「動機」概念を対面的状況につよく繋留することがもたらす負の効果についての指摘.すでに述べたように,キャンベルの懸念は個人の主観的・内的状態の記述と分析が等閑視されることにある.だが,ミクロな状況への繋留は,キャンベルのそのような懸念とは逆の方向にも動機論の守備範囲を狭める効果を生じうる.すなわち,ミクロな状況を超えるメゾ,ないしマクロな情況との相関までを射程圏におさめる動機論の可能性を,みずから閉ざすことになっているかもしれないのである.

2「動機」は何を指示するのか？

「動機とは言葉である」というテーゼを肉づけするには,「動機」の表現に適した言葉（動機用語）の種別を特定する必要がある．まず，ミルズ自身の説明を確認しておこう.[5]

最初に読者の目に留まるのは,「人が自分の行為に付与するあれこれの理由」(Mills 1940c: 904）というパラフレーズである．さらに読み進むと，動機用語を列挙した一節に行き当たる．

> 動機は，疑問視された行為が状況にもたらすと予期される帰結を，表現する．(「計画」として明言される）意図や目的は,予期される帰結についての意識にほかならない．つまり動機とは,帰結される状況にあてがわれる名前であり，そうした状況をもたらす行為の代用物なのである．疑問の背後には，それぞれの結末につながる実行可能な代替的行為がある（Mills 1940c: 905 強調は原文).

すなわち，行為の「理由（reason)」「予期される帰結（anticipated consequence)」「計画（program)」「意図（intention)」「目的（purpose)」を表わす言葉（以下では「計画用語」,「目的用語」等と表記）が「動機」に含まれる．あるいは,それらにあてがわれる名前を「動機」と呼ぼうというのである．

ただし，すべての理由用語や帰結用語が無条件で動機用語であると認められるわけではない．満たされるべき重要な要件がもうひとつある．それは,「現在・未来・過去にわたる計画や行為の正当化（justification）として是認される言葉」(Mills 1940c: 907）であること，あるいは,「当該の状況における標準的なきっかけ（cue)」(Mills 1940c: 906）として機能する語彙であることだ．複数の行為路線からの採択が許されている場面で，行為者はときに,「どうして他のでなくその行為を選んだのか／選ぼうとしているのか」という自他からの問いかけ（疑問・質問・詰問・糾問，等々）に遭う．そんな状況と適切に応接するうえで有効と目される表現，質問者（他者や自分）からの同意や納得を調達するのに役立つ言葉，それが動機用語である．

上の引用文では,「意図」「目的」「計画」「帰結」は互いに入れ替え可能な表現として扱われている．「○○するつもりだ」「○○するためだ」「○○することになっている」「○○になるはずだ」といった文例は，ニュアンスに多少の違いはあるにしろ，問題の行為がもたらすだろう事態を記述していることでは共通している．そうして描き出される行為の帰趨が質問者から受容されるとき，言明された「動機」は首尾よくその任務をまっとうする．

では,「理由用語」はどうだろうか．じつは，二つの点で理由用語はほかの言葉と毛色を異にする．

第一に，理由用語の汎用性は別して高い．たいていの動機は，「理由の言明」という形態をとることができる．たとえば，上記の例文はすべて，「○○するつもりだから」「○○するためだから」「○○することになっているから」「○○になるはずだから」というように，「理由」を言明する文に書き換えることが可能だ．おそらくこれは，動機の言明プロセスを起動する典型的なきっかけが，「なぜ・どうして（Why）」という疑問文であることと関係しているのだろう[6]．

第二に，帰結用語や意図用語が行為の終点を指示するのに対し，ひとり理由用語だけが行為の始点を指し示す表現である．論理上,「目的」が行為の事後に置かれるのと対照的に,「理由」は行為の事前に成立していることが要請される（「後づけの理由」がとかく非難の的になるのは，そのためである）.「ために」という繋ぎ言葉は，現在形に後続するばあい（「○○するために……」）は「目的」を表わし，過去形や現在完了形に接続するばあい（「○○したために……」「○○してきたために……」）は「理由」を表わす．目的用語や計画用語が聞き手の視線を未来に誘導するのと対照的に，理由用語は過去や現在までの経緯への注目をうながす．

ここで問題になるのは，「原因（cause）」の取り扱いである．過去への関心を喚起するという点で，原因用語は理由用語と同じ特性をもつ．ところが，ミルズ以降の動機論――主要には，シンボリック相互行為論の界隈で展開されてきた――では，「原因」に説き及ぶ言明を，つとめて守備範囲の外に放擲することが慣例となっている．たとえば A. ストラウスたちは，「シンボリック相互行為論者が保持する動機観では，動機を，……中略……行動の原因以外の何ものかとして扱う」（Lindesmith et al. 1999: 191 強調は引用者）と明確に述べている．また，近年刊行された『シンボリック相互行為論事典』に掲載された「動機」の項目には，冒頭につぎのくだりがある．

> 要するに，彼ら［マルクス主義者］は動機を原因とみなしている．だが，シンボリック相互行為論者はこの概念に何度も修正や再定式化を加えてきた．動機は，人びとが行為の方向づけの根拠として持ち出す理由や目的となったのである．実際のところ，動機は行為の一部なのであり，行為に先駆けるものではない．……中略……動機は，行為の原因ではなく，行為に付与される理由になった（Albas and Albas 2003: 349-350 強調は原文．［ ］内は引用者）.

つまり，何人もの手で「動機」概念に磨きをかけた結果，動機を原因と同視するような素朴な発想は一掃され，行為に付与される意味（理由や目的）として動機をとらえる，より洗練された見かたが普及したのだという．

シンボリック相互行為論者がこうして頑ななまでに「動機とは原因である」というテーゼを棄却する理由は，どこにあるのだろうか．すこし立ち入って考えてみたい．

ミルズ自身，動機論の文脈で「原因（cause)」という言葉をほとんど使っていない．だが，やっかいなことに，数少ない用例のひとつは，「動機とは原因である」とする見かたに与しているように読めてしまうのである．

> 言明される行為の予期，つまりその行為の「理由」は，行為にとって間接的な条件であることにとどまらず，「原因」という言葉が不相応とも言い切れない (not inadequate)，直接的かつ統制的な条件ともなる（Mills 1940c: 907).

ここから摘出すべき論点は，三つある．第一に，二重否定を使って慎重に論を運んではいるが，理由と原因の境目が判然としないばあいがあることが認められている．第二に，行為の間接的な条件が「理由」，行為を直接に統制する条件が「原因」であるとして，両者を弁別する基準が示されている．第三に，動機からアプローチすることにより，行為の「原因」を突き止められると主張している．

そもそも，ウェーバーが「動機」の定義で用いている‘Grund’は，「理由」とも「原因」とも解すことができる．日常使われる言葉として，両者に大きな径庭はない[(7)]．そう考えれば，ひとつめの論点は了解可能である．

そうはいっても，「理由」と「原因」の分析的な弁別には意義があるし，ミルズの提案は一考に値する．「水道管が詰まって水を使うことができず，朝食の支度が間に合わなかった」という言明を例にとれば，「水道管が詰まったこと」を「朝食の支度が間に合わなかった」ことの「原因」に，「水が使えなかったこと」を「理由」に，それぞれ認定することができる．付言すれば，この例文のような「原因→理由→行為（あるいは行為の欠如)」型の動機表明は，原因が特定されなくても成立可能である．「原因は不明だが，水を使うことができず，朝食の支度が間に合わなかった」という言いかたで足りる場面もあるだろう．要するに，述べられる「理由」の背後に意のままにならない事象があったことを申し立てることができればよいのだ．

自身の行為の「理由」を説明できない行為者は怪訝な眼差しを浴びるだろうが，自分の行為の「原因」を明確に述べられない行為者は，そのかぎりではない．おそらくそれは，「原因」の究明は多くのばあい専門家の領分である，という了解がそれなりに行きわたっているからではないか．「原因」とは，ある事象を説明するための「最後の言葉」として遇されているのである．

だからこそ，上記で三つめの論点は，見過ごしにできない問題をはらんでいる．「動機の追究がいつか原因の究明につながる」とは，動機研究が「最後の言葉」を提供する，と述べているのに等しい[(8)]．それは，ミルズが構想する動機論の課題として，きわめて落ち着きのわるい主張と言わざるをえない．というのも，彼は一方で，社会的関係や社会的行為

の「原因」をもとめて「胃の激痛や血中アドレナリン濃度等々」の生理学的プロセスに遡及する類いのアプローチを，明確に否定しているのだから（Mills 1940c: 909 fn.）[9].

動機の社会学は，「最後の言葉」を目指すのではない．むしろ，どれを「最後の言葉」に認定すべきかの判断を停止して，「最後の言葉」の候補群をつぶさに観察しようとする．

以上の考察をふまえて，「原因」の取り扱いの一件に戻ろう．動機の社会学が「最後の言葉」候補群をもれなく観察対象に据える以上，原因用語を視野から外す特段の事情はない．むしろ，「最後の言葉」の効果を倍加するうえで，「行為の直接的・統制的な条件」である「原因」への訴求が手段として選好されるのは，ごく自然な成り行きだとさえ言える．動機の言明という社会現象を包括的につかまえるうえでは，「行為に付与される目的・理由・意図」とともに，「行為を引き起こしたと目される原因」もまた，関連する重要なカテゴリーとして，観察・記述・分析の対象に包含するべきである．

動機の語彙論にとって，「言葉として表現される動機」はひとしく観察の対象である．その際，「表現される動機」の真偽や適否について判断を下すことは，守備範囲の外に置かれる．「原因」について再説するなら，動機の語彙論は特定の「原因論」に肩入れしたり，究極の「原因論」を追究したりはしない．あらゆる「原因論」は，ひとしく観察の対象である（その意味で，言明される動機が原因として機能するとしたミルズの一文は，明らかに自分で敷設した土俵を踏み越えている）．目的用語，意図用語，計画用語，帰結用語，理由用語，そして原因用語．これらのうちひとつ以上を用いて行為に「正当な」意味を付与し，行為の道筋をつけようとする発話や文すべてが，動機の語彙論の素材候補である．

3 「語彙」を観察するとはどのようなことか？

よく知られるように，「動機の語彙」というコンセプトを最初に打ち出したのは，ケネス・バーク（Burke [1935] 1984）である[10]．彼は動機を，人びとが行為の「解釈に使う用語群（terms）であり，そうである以上当然のこと，私たちの世界観全体の枠組みの内部に位置づくものである」（Burke [1935] 1984: 25）と簡潔に規定している．「動機とは言葉である」とするテーゼが，すでに明確なかたちをとっている．

バークのテクストでは，‘vocabulary of motives’（Burke [1935] 1984: 18, *et passim*）のシノニムとして‘terminology of motives’というコンセプトも頻出する．たとえば，「非フロイト主義的な動機のターミノロジー」のすこしあとに「教会のヴォキャブラリー」という表現が読まれる．同じページには，「行為の説明のために持ち出される用語群（set of terms）」という言い回しも確認できる．つぎのページには，「動機の理論（theory of motives）」という表現もみえる（Burke [1935] 1984: 17, 18）．さらに，「動機の図式（scheme

of motives)」(Burke [1935] 1984: 26) も明らかにそれらと同義である．バークのテクストでは，‘vocabulary = terminology = set of terms = theory = scheme’ という等式が成り立っている．五者は，互換的に用いられているとみてよい．

バークのいう ‘set of terms = terminology’ に，ここでは「用語系」という訳語を充てよう．それは，バークが各所で重用したコンセプトのひとつである．1960年代に書かれたテクストの「カリキュラムを構成するさまざまな科目は，実際のところ，同じ数の相異なる用語系にほかならない (The various courses in the curriculum are in effect but so many different terminologies.)」(Burke 1963-1964=1966: 5) という用例から，ひとまとまりの知識システムを指して「用語系」が使われていることは明らかだろう．バークは人がものを考えるプロセスを経験する際に使用する言葉 (terms) の作動に，ことのほか重要な役割を担わせている．彼の考えを集約する箇所を引こう．

> 私たちが使う用語群 (terms) の性質は，注意を向けるべき領域を指示するという意味で，私たちの観察の性質に影響をおよぼす．そればかりではない．「観察」のほとんどは，観察をおこなう際に準拠する特定の用語系のもつ含意にすぎないとも言いうる．つまり，私たちが「現実」の観察結果であると思い込んでいることの大半は，特定の用語群の選択に内在する可能性から紡ぎだされる織物にすぎないのである (Burke 1965=1966: 46 強調は原文)．

観察にあたって採用される用語群＝用語系は，どの方角に視線を定めるべきかを指図するだけでなく，アウトプットされる観察結果までも予告するというのだ．人はどの用語系を選択するかについて一定の裁量を許されているのかもしれない．だが，いったん選択した用語系は，人から思考の自由を奪ってしまう．しかもやっかいなことに，「私たちは用語系のスクリーン (terministic screen) を使用しないわけにいかない．なぜなら，私たちは用語を使わなければ何ひとつ言うことが叶わないのだから」(Burke 1965=1966: 50)．一方で言語使用を可能にする条件でありながら，他方では言語使用のレンジを厳しく制限する．そのようにして言語を介した行動，言語という行動をつよく規制する用語系の作動を，長年にわたってバークは注視しつづけたのである．

ミルズがキャリアのごく初期に公表したテクストには，語彙＝用語系に関説した箇所が散見する．それらはおしなべて，バークから得た着想を，知識社会学の新たな展開に活用しようとする論脈で読まれるべきものだ[(11)]．

> 語彙は，たんなる言葉の連なりではない．語彙の内部には社会の構造 (societal textures) ——制度的・政治的な座標——が織りなされている．語彙の背後には，一群の集合的行為がある (Mills 1939: 677)．

語彙の研究を通じて，私たちは隠された価値評価とその背後にある集合的パターン――社会的行動にとってのきっかけ(cue) ――を探知する．思想家の社会的・政治的「根本原理(rationale)」は，その人の言葉の選択と使用に表出する．語彙は思想の表現に社会的な方向づけを与えるものである（Mills 1939: 678).

用語群と分類法を備えた専門的な語彙の獲得を通して，思想家はいわば色つきの眼鏡(colored spectacles)を装着することになるのだ（Mills 1940b: 322).

動機の語彙論における「語彙」の位置価もまた，同時期に書かれたこれらのテクストのなかに置いて測定するべきだろう．私の考えでは，バークの影響を色濃く滲ませるミルズの「語彙」論の要諦は二つに集約できる．

第一に，「語彙」とは，たんなる用語群の集積ではない．任意の思想の正誤，適否，善悪，優先順位，等々を判別する価値基準にしたがって整序された一群の用語＝用語系，それが「語彙」と呼ばれる．だから，ある人が採用する用語系にはその人の思想の型が露呈することになるし，思想の表現とは実のところ，ある語彙から見繕った用語を指定された用法で「正しく」運用することにすぎないとも言える．そうして知識を産出する装置として機能している面をとらえれば，語彙＝用語系を一種の「理論」に見立てることも不当ではないだろう．ノーウッド・ハンソンの有名なコンセプトを借用し，動機の帰属・言明は動機理論負荷的な行為であると言ってもよい．

第二に，各種の「語彙」は各種の社会的制度や集合的行為と切り離すことができない．別の言いかたをすれば，特定の語彙は特定の社会状況（情況）や社会制度と相関的に成立し，維持され，更新され，または衰滅する．そう考えれば，語彙とそれを囲繞する社会的環境のそんな相関性を解明するという知識社会学的な課題が浮上してくる．実際，ミルズは動機の用語系の例をいくつかあげたうえで[12]，そうした語彙＝用語系の「類型的なカタログ」(Mills 1940c: 913）を作成し，「それらを歴史上の時期や特定の状況における動機の語彙として位置づける」(Mills 1940c: 913）作業を，正しく「知識社会学の課題のひとつ」(Mills 1940c: 912）に数え入れているのである．

動機の語彙が行為に際して「効力（efficacy)」をもつことに，ミルズは再三注意をうながしている（Mills 1940c: 907, 908, 910)．言明される動機の機能を，たんに行為の説明や正当化とだけ見るのでは足りない．動機の語彙は，ときに行為を促進し，ときに行為を抑止するというかたちで，その効力を発揮するという．

バークの着想を継承したミルズの「語彙＝用語系」論をふまえれば，この「効力」の含みをより明確につかむことができよう．言葉の使い手である私たちは，動機の語彙を自在に駆使して問題状況を切り抜ける技量をそれなりに備えていると自負しているかもしれない．だが，実情はそんな思い込みにまったく相違し，私たちは個人的・私秘的な事情を吐

露するのに際しても「出来合いの（tailor-made）」動機用語で応接するのがせいぜいであり（Lindesmith et al. 1999: 187），従前に習得した用語系の指図するまま，不特定多数の言語使用者が持ち出すのと大同小異の話柄を，同じような口吻で語らされているのにすぎないのかもしれないのだ．

動機の「効力」については，ミルズが明示的に述べていない側面がもうひとつある．その点については，J.P. ヒューイットが提示した「疑似理論（quasi-theory）」というコンセプトが役に立つ[13]．因果関係の究明にあたっては，通常，当該の結果を同定したうえで，それを説明できる妥当な原因を探索する，という手順がとられるが，「疑似理論では，結果より前に原因が同定され，その原因の観点から結果のリアリティが構築される」（Hewitt 1994: 200）．すなわち，自己成就的予言効果をもくろんで組み立てられる「原因論」が，ヒューイットのいう「疑似理論」である．ねらいどおりウソからマコトが出現するばあい，当の疑似理論は一定の「効力」を発揮したと認定することができる．すぐれて再帰的な社会過程では，ごくありふれた光景である．原因用語や理由用語，目的用語をそれらしくちりばめ，「腰痛を解消する方法」「理想の子育て術」「教育問題の解決法」等々の究明に成功したと嘯く疑似理論の例は枚挙にいとまがない．

「疑似理論」もまた，動機の語彙＝用語系＝理論の一種であると認定できる．語彙＝用語系論の射程拡大をはかろうとするなら，あらゆる動機理論を――もちろん，専門家が提唱する用語系を含めて――「疑似理論」に見立てて観察するという方法は，有望な選択肢と言えるだろう．

おわりに

本稿では，動機の語彙論を構成する「動機」と「語彙」という二つの部品について，性能の点検を試みた．それぞれについて再説しよう．

「動機」とは，目的用語，意図用語，計画用語，帰結用語，理由用語，原因用語のうちひとつ以上を用いて行為に「正当な」意味を付与し，または行為に実行の機縁を与え，行為の道筋をつけようとする各種の発話や文をいう．

「語彙」とは，思想の表明を可能にするとともに制約する力をもつ用語群を指す．語彙＝用語系は，所定の知識を産出する理論装置として機能する．

「動機の語彙」論は，特定の動機理論とその効力を担保する社会的環境との相関的な関係性を記述し，分析し，解明することを志向する，知識社会学の一角に位置づく研究プロジェクトである．

モーティヴ・トーク論では，問題状況がどのように（how）打開されるかが精密に記述・

分析される．それに対し，動機の語彙論は，問題状況が打開される際にどんなことが(what)語られるのかに焦点を合わせようとする．二つが両輪となって前進をつづけることにより，「動機」現象の社会学的解明は推進力をいっそう増してゆくはずである．

注

(1) ‘motive talk’は，スコット＝ライマンにはじまる一連の議論の総称としてJ.P.ヒューイットが提案した用語である（Semin and Manstead 1983: 71）．モーティヴ・トーク論の動向を詳説した論稿にHunter（1984），近年までの研究成果を総括したテクストにAlbas and Albas（2003）がある．

(2) キャンベルは当初（Campbell 1991），動機の語彙論とモーティヴ・トーク論を切り分け，前者には一定の評価を与えたが，その後，ミルズの仕事もほぼ全面的に否定する論調に転じた（Campbell 1996a; 1996b）．

(3) 「私たち」の存在は，普及している邦訳（清水幾太郎による）では隠されてしまっている．

「動機」とは，行為者自身や観察者が或る行動の当然の理由と考えるような意味連関を指す．「意味適合的」とは，行動の諸部分の関係が，思考や感情の平均的習慣から見て，類型的な（普通は「正しい」という）意味連関と認められる程度の連関性ある過程を辿る行動のことを指す（Weber 1972: 19-20）．

この点，Gerth and Mills（[1953] 1964）でも参照されている英訳のほうが，原文のニュアンスをうまく移し換えている（イタリックによる強調は引用者による）．

A motive is a complex of subjective meaning which seems to the actor himself or to the observer an adequate ground for the conduct in question. *We* apply the term ‘adequacy on the level of meaning’ to the subjective interpretation of a coherent course of conduct when and in so far as, according to *our* habitual modes of thought and feeling, its component parts taken in their mutual relation are recognized to constitute a ‘typical’ complex of meaning. *It is more common to say* ‘correct’ (Weber [1947] 1964: 98-99).

(4) より正確に言えば，行為がやりとりされる状況の平面では，「行為者」と「観察者」の役割がたえず入れ替わるのが常態である（西川 1991: 75）．

(5) ミルズは「動機の語彙」をめぐって二つのテクストを遺したが，本稿ではもっぱらMills（1940c）を参照する．ミルズ動機論の発想をより鮮明に表現した作品であるとの判断に立つからである．Gerth and Mills（[1953] 1964）との異同については，内田（2012）を参照されたい．

(6) A.シュッツもこのことを指摘している．彼によれば，目的表現が理由表現に転換される際には，「私はその行為に先行する企図をみているのであり，そしてその企図のなかで未来完了で予想される〔完遂された〕行為（アクト）をみているのである」（Schutz 1962: 71=［訳］1983: 140-141）．なお，ここでは「目的動機」と「理由動機」の類別をめぐるシュッツの議論には立ち入らない．動機にかかわるシュッツの所説を批判的に検討したテクストとして，Bernstein（1976: 161-167）; Perinbanayagam（1985: 101-135）; Campbell（1996a: 104-105）をあげておきたい．

(7) 邦訳に際しては「根拠」という訳語も選択できるが，「理由」「原因」にくらべ不自然な印象を与えることは否めない．その点，英訳者のタルコット・パーソンズは，‘ground’を充てる

ことができた.

(8) L. テイラーは，動機を行為の先行変数（antecedent variables）の一種に位置づける従来の発想に抗しきれなかったミルズの行論に「心理学的退行（psychological regression)」をみている（Taylor 1979: 151-152).

(9) ミルズは別のテクストで,「動機の語彙論」の基底には「社会的・歴史的にレリヴァントであり，かつ，生理心理学（physiological science）と完全に同等で並行的な試みであるような社会心理学」が必要であるという問題意識があったと述懐している（Mills 1940a=1963: 469). つまり，生理学的なアプローチを否定はしないけれど，それと別個のゲームとして社会学的な動機論の端緒を開こうとしていた，ということのようである．なお，ライマン＝スコットによれば,「釈明 (account)」という概念は,「動機」にまとわりつく生理心理学的還元主義の含意を払拭する狙いを込めて打ち出したものだった（Lyman and Scott [1970] 1989: 136).

(10) バークの動機論の検討を主題に掲げた W. ベノワの論稿（Benoit 1996）を参照．ベノワはミルズによる継承の方向性を是認している.

(11) この論脈は，伊奈正人がすでに発掘に着手している（伊奈 2010: 14-16).

(12) 順不同で,「宗教的動機」「道徳・倫理的動機」「純愛的動機」「金銭的動機」「利潤・営利的動機」「心理学的動機」「フロイト主義的動機」「マルクス主義的動機」.

(13) 「疑似理論」のアイデアは, Hall and Hewitt (1970); Hewitt and Hall (1973) で詳説されている.

引用・参考文献

Albas, Cheryl A. and Daniel C. Albas, 2003, "Motives," in Larry T. Reynolds and Nancy J. Herman-Kinney, eds., *Handbook of Symbolic Interactionism*, Altamira Press: 349-366.

Benoit, William, 1996, "A Note on Burke on 'Motive'," *Rhetoric Society Quarterly* 26(2): 67-79.

Bernstein, Richard J., 1976, *The Structuring of Social and Political Theory*, University of Pennsylvania Press.

Burke, Kenneth, [1935] 1984, *Permanence and Change: An Anatomy of Purpose* (Third Edition with a New Afterword), University of California Press.

———, 1963-1964, "Definition of Man," *Hudson Review* 16(4), in Kenneth Burke, 1966, *Language as Symbolic Action: Essays on Life, Literature, and Method*, University of California Press: 3-24.

———, 1965, "Terministic Screens," *Proceedings of the American Catholic Philosophical Association* 39, in Kenneth Burke, 1966, *Language as Symbolic Action: Essays on Life, Literature, and Method*, University of California Press: 44-62.

Campbell, Collin, 1991, "Reexamining Mills on Motive: A Character Vocabulary Approach," *Sociological Analysis* 52(1): 89-97.

———, 1996a, "On the Concept of Motive in Sociology," *Sociology* 30(1): 101-114.

———, 1996b, *The Myth of Social Action*, Cambridge University Press.

Gerth, Hans and C. Wright Mills, [1953] 1964, "Chapter V: The Sociology of Motivation," in *Character and Social Structure: the Psychology of Social Institutions*, Harbinger Books: 112-129.

Hall, Peter M. and John P. Hewitt, 1970, "The Quasi-Theory of Communication and the Management of Dissent," *Social Problems* 18(1): 17-27.

Hewitt, John P., 1994, *Self and Society: A Symbolic Interactionist Social Psychology* (Sixth Edition), Allyn and Bacon.

Hewitt, John P. and Peter M. Hall, 1973, "Social Problems, Problematic Situations, and Quasi-Theories," *American Sociological Review* 38(3): 367-374.

Hunter, Christopher H., 1984, "Aligning Actions: Types and Social Distribution," *Symbolic Interaction* 7(2): 155-174.

伊奈正人, 2010,「動機の語彙論と知識社会学――動機付与論から「動機論の動機論」へ――」,『経済と社会：東京女子大学社会学会紀要』38: 1-24.

Lindesmith, Alfred R., Anselm L. Strauss, and Norman K. Denzin, 1999, *Social Psychology* (The 8th Edition), Sage.

Lyman, Stanford M. and Marvin B. Scott, [1970] 1989, *A Sociology of the Absurd* (Second Edition), General Hall.

Mills, C. Wright, 1939, "Language, Logic, and Culture," *American Sociological Review* 4(5): 670-680.

———, 1940a, "The Language and Ideas of Ancient China: Marcel Granet's Contribution to the Sociology of Knowledge," *Mimeographed Material, Department of Sociology, University of Wisconsin, in* C. Wright Mills, 1963, *Power, Politics and People: The Collected Essays of C. Wright Mills* (Edited and with an Introduction by Irving Louis Horowitz), Oxford University Press: 469-520.

———, 1940b, "Methodological Consequences of the Sociology of Knowledge," *American Journal of Sociology* 46(3): 316-330.

———, 1940c, "Situated Actions and Vocabularies of Motive," *American Sociological Review* 5(6): 904-913.

西川珠代, 1991,「社会学における「動機」概念の変容――ウェーバーの動機理解と「動機の語彙」論の動機付与――」,『ソシオロジ』36(1): 63-79.

Perinbanayagam, R. S., 1985, *Signifying Acts: Structure and Meaning in Everyday Life*, Southern Illinois University Press.

Schutz, Alfred, 1962, *Collected Papers I: The Problem of Social Reality* (Edited and Introduced by Maurice Natanson, with a Preface by H. L. Van Breda), Kluwer Academic Publishers.(渡部光・那須壽・西原和久訳, 1983,『アルフレッド・シュッツ著作集 第Ⅰ巻 社会的現実の問題〔Ⅰ〕』マルジュ社.)

Semin, G. R., and A. S. R. Manstead, 1983, *The Accountability of Conduct: A Social Psychological Analysis*, Academic Press.

Taylor, Laurie 1979, "Vocabularies, Rhetorics and Grammar: Problems in the Sociology of Motivation," in David Downes and Paul Rock, eds., *Deviant Interpretations*, Martin Robertson & Co.: 145-161.

内田健, 2012,「「動機」の社会学再考―― C.W. ミルズの二つのテクストを読む――」『新潟大学教育学部研究紀要』4(2): 187-198.

Weber, Max, [1922] 1964, *Wirtschaft und Gesellschaft: Grundriss der Verstehenden Soziologie* (Studienausgabe Herausgegeben von Johannes Winckelmann), Kiepenheuer & Witsch.

———, [1947] 1964, *The Theory of Social and Economic Organization* (Translated by A. M. Henderson and Talcott Parsons. Edited with an Introduction by Talcott Parsons), Free Press.

———, 1972,『社会学の根本概念』(清水幾太郎訳) 岩波文庫.